

慈悲にかわりめあり

釋 惟蓮

山陽教区坊守会一泊研修会にて、二日間長田浩昭さんのお話を聞いた。長年原発の問題を学び、考え、行動してこられた長田さんのお話は、日本のこの異常事態に、浄土真宗が明らかにされたお話をいただいたと感じられた。直接的には「原子力」というものの、歴史、意味、本当の姿を学びつつ、それがまさにお経と、「念仏」の明らかになるお話だった。

今世の中で起きていることと、親鸞聖人の見出されたことと、お釈迦様の言葉が、つながっている太い綱がびんと張って、埋もれていた地中からその姿を現したみたいだった。二千五百年前から、人間が課題にしてきたもの。私たち凡夫が【私】という所に、打ち建ててしまう一つの暴力、我というもの。

漢字「我」の左側は鋭い「ぎ」の歯を抽象化したもので、右側は剣に長い柄を取り付けた武器「戈(ほこ)」のことと知った時、納得が行った。私たちは一人ひとりそんな武器を私として生きている。漢字は本質を言い当てている。世間では自我の確立が奨励される。子どもたちも自分の能力を磨くようにと育てられる。確かに世の中ではそれがないと生きて行けないように見えるけれど、実はそうではない。仏教では「我」はやがて壊れるものと教えている。原子力は「我」とは、英語を直訳すれば、核発電だそう。核兵器と同じ核爆発が起されている。ウランを核分裂させて、発生する熱でお湯を沸かしその勢いでタービンを回し発電する、蒸気機関車の原理と同じ。

核爆発は危険だから、冷やしながら使わなければならない。毎秒数トンという冷却水を海から引き込み、七度高くなった排水を又海に戻す。結果三分の二のエネルギーを海に捨てる。海の生態系は破壊される。様々なものを破壊する。土地に根付いた人々の暮らし、人間関係をまず破壊し、その後危険な仕事を地元の人にさせる。巨大な暴力。

こんなに危険で、破壊的なエネルギーを国策としたことには訳がある。ウランを核分裂した後プルトニウムができる。これを再処理すると核兵器の原料になる。日本は非核三原則という表向きの顔と、その裏で核武装の為なら犠牲は惜しまないという二重性の社会なのだ。

原発の問題からは、そんな複雑な裏表のある私たちの、共同で持つている「我」を感じる。隣国に攻め込まれたらどうするのだと、本当かどうかわからない危機を想定し、原発(核武装)は国防の問題だと言う人がいる。長田さんは無量寿経で語られる「諸天」をマスコミだと指摘した。私たちの考えが、実は様々な「天の声」からコントロールを受けていることを自覚しなければならぬ。日本はアメリカの占領国で、米軍基地が日本のあちこちにあるのは日本を守っているのではなく、日本を見張っているのだと、ネルソンさんが教えてくれた。原発を誘導したのもアメリカだと、1994年のNHKの特集番組が検証している。他国の攻撃を受けないために原爆の材料を山ほど持つて(プルトニウム保有量四十五トン)、日本は国土の半分が核汚染してしまった。

敗戦という言葉がよき。そこで、明らかになったのは、やはり人々は国から切り捨てられるのだということ。原発の問題はエネルギーの問題と違うのではなく、国策に対する問題なのだ、長田さんは押さえられた。親鸞聖人は国家権力から流罪にあつた人々のうちの一人。浄土真宗の系譜は切り捨てられる民衆の側にある。念仏はそこに発せられる、深い悲しみと怒りの叫びの声なのだ。

無量寿経でお釈迦様は、諸天から聞いたのではなく、自らの所見でお釈迦様に質問した弟子を喜ばれるということが語られている。真実は、内側から湧いてくるものなのだ。それが今、この国にはわき起こっている。東京で6万人が集まった時、福島は叫びを聞いた。どれほどの苦悩を私たちは打ち捨てているのか！いやすでもう、打ち捨ててきたのか！

歎異抄第四章の解釈で、すえとおりたる大慈悲心とは何なのか、聖道の慈悲は始終ないからだめなのか、その解釈に定まらないものがあつたけれど、今回長田さんの言葉ではつきりした。聖道の慈悲を尽くし、限界があることを知りつつも、あきらめずやり続けるなかで、かわりめがあるということなんだと助けられない、成果が見られない……ここで打ち砕かれるのは自力の心、我なのだ。それが壊れた後には、すえとおりたる念仏の大慈悲心によって、動かされるというあり方に変わって行くのだと。

それは打ち捨てられようとする放射能の被害から避難した人、残った人それぞれの姿がそれを証していた。出会いによる私自身の所見として記したい。